

江藤隆司

穀物需給の構造的変化

トウモロコシのことを英語で何と言いますか？ と聞かれたら、恐らく殆どの方が CORN と、オウム返しに答えるのではなからうか。

筆者が商社に入社して配属されたのがトウモロコシ等を輸入する部署だった。上司から「タイルを担当するように云われ、それは何ですか？」と質問したら「タイルのトウモロコシだ」と答えた。どうして「タイル」と云わずに「タイル」と云うのか不思議になって初めて CORN を辞書で引いた。英国では「穀粒とか穀物」を意味し、小麦や燕麦などその地域で収穫される穀物の総称とある。トウモロコシそのものを意味するときは MAIZE と称する。米国では CORN と言えば、トウモロコシそのものを意味する。

旧ソ連時代に米ソの間にあった CORN にまつわる裏話を紹介しよう。米ソ両国は国家間穀物協定を締結していた。協定で例えば、年間、米国は CORN をソ連に二〇〇〇万トン売り、ソ連は買うことを義務づけられていた。年度末レビュー時、ソ連は一九〇〇万トンしかトウモロコシを買い付けていないことが判明した。米国は「協定違反」とソ連を非難。ソ連は二〇〇〇万トン以上の CORN を買い付けたと主張。内訳としてトウモロコシの他に「コウリヤン」を二〇〇万トン買い付けていたことを示した。ソ連は CORN のことを英国風に穀物の総称と理解していたようだ。米ソ間で起こった CORN の解釈を巡っての笑い話になった。以降の協定では FEED GRAIN (飼料穀物) と明記されるようになった。

さて、世界の全穀物類の生産高の内、トウモロコシは最大の生産高(約八億トン)を誇る作物だ。米国が世界最大の生産国で、最大の安定供給元としての輸出の座を堅持している。中国のように生産高が多くても国内需要が旺盛であれば、輸出余力に欠ける。逆に、アルゼンチンのように生産高は多くなくても、国内需要が少ないことから輸出国として位置づけられている。同国の畜産は牛が中心だが、牛肉は、GRAINFEDではなく、草食系 GRASS FEDなので、トウモロコシに対する家畜飼料としての国内需要が少ないのだ。

トウモロコシの二〇年前の世界全消費量は四億七〇〇〇万トンほどだったが、現在は八億一〇〇〇万トンに増大。内、主用途の飼料向け消費量は四億九〇〇〇万トン以上にも及ぶ。しかし、世界全消費量に占める割合は八%ほど低下しておりその背景には、用途の多様化がある。米国を中心に工業用のエタノール生産のために消費されるトウモロコシが急増し、飼料用の消費割合を低下させている。米国では現在、一億一〇〇〇万トンほどのトウモロコシがエタノール生産のために消費されているがこれは一〇年前の一四〇〇万トンに比べ約八倍である。米国の年間輸出量は五一〇〇万トンほどだからその倍以上のトウモロコシがエタノール生産のために消費されている勘定だ。需給構造の大きな変動が続いている。

このような構造的な需要増加に供給がいつまでも追いつけるか、注目される。

えとう たかし / 飼料輸出入協議会専務理事

1964年 伊藤忠商事(株)入社。1977年のバンコク赴任を初めとしてニューヨーク、シカゴと海外店を移駐し、トウモロコシなど穀物取引の現場を歩く。帰国後主席アナリストとして穀物全般の情報提供業務を遂行。定年退職後2002年6月から現職。著書に「トウモロコシから読む世界経済」光文社新書、「命の源…穀物のことを知ろう」商品市況研究所(ともに2002年)がある。